

2. かかわりの歴史

人類と自然との関係を見るときには、生活スタイルの変化が大切な指標になると思います。自然現象は起きてもそれが自然災害になるには、その対象があるからです。それは人であったりものであったりするわけで、素因と誘因が関係します。自然現象は気象災害が引き起こす地震、火山、台風、豪雨等による洪水、土砂災害、旱魃、山火事、熱波、寒波などのリスクに関わります。それによって、人や所有物、環境に大きな変化や変異を発生させることが自然災害ということになります。自然現象は抑止も抑制もできませんし、そのものは変化を続けています。自然災害への備えでいえば、例えば、気象変動や異常気象といったことでの影響があるとも言われていますので、被害の対象物について、生活スタイルを是正または土地利用という面から最小化への対応をしていくことが考えられます。

これまでの人間の歴史を見ると、狩猟採集時代→農業・定住時代→産業革命→人口増時代という変遷が大きく環境とのかかわりを変え、新たな不適合を生んできていることとなります。人類史における社会の変化を大きく見てみると、約 20 万年前に人類が誕生して、しばらくは自然からの恵みを一方的に利用していましたが、約 5 万年前から自然の振る舞いや単なる利用を超えた考えが芽生えてきて、約 1 万年前になると農耕が開始されることとなります。そして、定住型というか土地を活用することに生活手段が変化し、それが都市の成立へ向かうことになったと考えられます。そして、約 300～400 年前になると、いわゆる近代化が始まり、市場化、産業化、情報化、金融化というようなスピードのある社会変化を見せて現在に至っていることとなります。以上のような拡大・成長は、環境との接触反応の場面も比例して多くなり、その段階ごとに自然現象との戦いにもなってくるようになります。極端に言えば、当初は自然現象を回避するためには移動すれば済んでいたものが、定住化して定常化してくると、そこでの自然現象とつき合うこととなります。また、自然現象も人間生活と密接に関係していて、人間の社会活動が気象変動に影響を及ぼすまでに拡大していて、その変動によってこれまで経験していない規模や頻度での災害を自業自得的に受けることになってきています。つまり、経済社会の構造変化は、物質の消費、エネルギーの消費、情報の消費、時間の消費と進む中で、さまざまな負の生産もしてきています。これからは AI や幸福、持続可能性、地方問題を含む分散型社会と言ったことがテーマになってきて、新たな構想が生み出されるものと思われませんが、その基本に自然現象による生活への影響を極力避けるようにしなければなりません。そして、あらゆるリスクを特定し、それへの課題と解決策を模索し続け、実践の中での改善、修正と言った作業が不可避になると思われます。改めて、自然と共生していくには、これまでの経験を生かして、具体的な行動を起こす段階になっていて、それはさまざまな領域からの切り口とその融合が期待されていると考えられます。自然現象に対しては、データに基づく適切な行動を継続し、それによるところの災害に対しては、地域の特性にあった備えをハード、ソフトの両面から対応することが重要なことではありますが、最も基本となることはわれわれが自然災害や自然現象に関して関心を持ちつづけられるようにすることだと思います。